

邵雍と「太平」——「芳草」余論——

森 博 行

目次

序文

第一節 なぜ「太平」か——宋代と「太平」の氣象

第二節 邵雍の詩における「太平」——「芳草」と「太平」の相関関係

第三節 なぜ「太平」を歌わなかったのか——邵雍の新法批判

第四節 なぜ「太平」を歌ったのか——邵雍の自己表現

第五節 邵雍と王安石——君臣論をめぐって

結語

注釈

序文

私は「芳草」考(三)——邵雍と「芳草」——と題する論稿において(注1)、邵雍の詩に現れた「芳草」を分析することによって、

- (一)、邵雍はこの地上を仙界と観念し、彼にとって「芳草」は地上の仙界を彩る光景である(注2)
 - (二)、邵雍がこの地上を仙界と考えることができたのは、彼の哲学の必然的帰結である
 - (三)、邵雍の思想遍歴において、熙寧三年(1071)、六十歳の時がひとつのエポックである
- ことなどを論じた。

邵雍は神宗の熙寧十年(1079)に六十七歳でなくなるのだが、邵雍晩年の熙寧年間(1066—1079)は王安石(1031—1086)の新法が施行されていた期間である。邵雍は民間の学者であったけれども、旧法党の立場に立つ人物であり、新法との間で軋轢があった。邵雍と新法との関係、今回のテーマの中心はこの点にある。前回は「芳草」を通して邵雍の内的生活の跡をのぞいてみた。今回は邵雍の詩にやはり頻繁に現れる「太平」という言葉を手がかりにして、彼の外的生活の一端を探ってみようと思うのである。なお本論は前稿のように「芳草」を直接の主題にするわけではなく、私が右述した問題に逢着したのは、「芳草」との因縁からである。よって前回の論稿の余波という意味で、題目を「邵雍と「太平」」とした上で、副題に「「芳草」余論」と付けた。

第一節 なぜ「太平」か—宋代と「太平」の気象

邵雍は熙寧七年(1075)、六十四歳、「喜楽吟」(卷十)と題する詩において

生身有五樂 身を生じて五樂有り

居洛有五喜 洛に居りて五喜有り

人多輕習常 人は多く輕がるしく常に習い

殊不以為事 殊に以て事と為さず

吾才無所長 吾が才 長ずる所無く

吾識無所紀 吾が識 紀す所無し

其心之泰然 其の心の泰然たる

奈何人了此 奈何ぞ 人 此れを了らん

と歌つたとき、自注の中で五樂の内の四番目に「太平を見る」を挙げた（他の四つは、中国に生まる、男子為る、士人為る、道義を聞く。いかにも当時の道学者にふさわしい見解である）。しかも彼は辞世の作である「病亟吟」（卷二十）において次のように歌つた。

生于太平世 太平の世に生まれ

長于太平世 太平の世に長じ

老于太平世 太平の世に老い

死于太平世 太平の世に死す

客問年幾何 客は問う 年 幾何ぞと

六十有七歳 六十有七歳

俯仰天地間 天地の間に俯仰して

浩然無所愧 浩然として愧づる所無し

「生・老・病・死」にあらずして、「生・長・老・死」、生涯を通じて「太平」であったというのである。この「太平」について、島田虔次氏は、張横渠の言葉「万世ノタメニ太平ヲ開ク」は、「宋学の根本精神というか、根本的気分というか、そのようなものを表現したことばとして、これほどみごとなものはないように思われる」（注3）といわれた。確かにこの「根本的気分」は宋学に限らず、文学にまで浸透している。よく知られているとおり、もともと歌謡曲の歌詞である詞という文学は、唐代に民間から起こり、宋代に隆盛した新しいジャンルだが、邵雍（1011-1077）より一世代ほど先輩に当たる柳永（969-1054?）は、詞の名手である。若い傾色町に出入りして、民間の詞の影響を受けた彼の作品は、旅愁や恋情を感傷的に歌って大衆的な人気を博し、外国の西夏でも歌われるほどであった（葉夢得『避暑錄話』巻下）。このような柳永に二百首ほど作品が伝わっているが（注4）、「四分の一近くの詞が昇平（太平と同じ引用者）を讃えて歌う」（歌頌昇平者近四之一）（注5）といわれ、柳永よりやや後輩・黄裳から

予 柳氏の楽章を觀るに、其の能く意（嘉の誤り）祐の間の太平の氣象を道うを喜ぶ。（予觀柳氏樂章、喜其能道意
祐間太平氣象。『演山集』卷三十）

とほめられたり、南宋の劉克莊（一二一七-一二七三）から

余れ謂えらく蒼卿（柳永の字）は直だ光景に留連し、太平を歌詠するのみ。（余謂蒼卿直留連光景、歌詠太平爾。

『辛稼軒集序』『後村先生大全集』卷九十八）

とそしられたりした。『楽章集』から「太平」という言葉が使われている例証を挙げれば、

漸天如水 漸く天は水の如く

素月當年 素月は年に当る

香徑裏 絶纓擲果無數 香径の裏 絶纓 擲果 無數なり

更闌燭影花陰下 更は闌なり 燭影 花陰の下

少年人 往往奇遇

少年の人 往往 奇遇す

太平時 朝野多欲民康阜

太平の時 朝野は欲び多く 民は康阜なり

随分良聚

随分いなるとよ 良聚す

堪对此景

此の景に對して

争忍独醒婦去

争でか忍んで独り醒め婦り去るに堪えん

「迎新春」詞（なほ管變青律の句で始まる）の後闕である（『楽章集』巻上）。恋と旅の詞人・柳永も、恋情と旅愁ばかりに憂き身をやつしていたのではないのである。

以上のような状況を考えれば、地上を仙界と考える邵雍が、この世の中を「太平」と考えたとしても少しも不思議はない。邵雍は六十有七歳の生涯において、どの程度「太平」という言葉を使っているか、多少の遺漏があるかもしれないが、試みに年代ごとの表を作ってみた（なお「太平」と類似の言葉に「升平」があるが、極めて少ないということと今回は「太平」の軌跡をさぐるということで省略した）。

| | | | | | |
|------|--------|------|--------|----|----------|
| 嘉祐三年 | 1 (三三) | 熙寧元年 | 0 (二六) | 七年 | 18 (三五) |
| 五年 | 0 (二六) | 二年 | 4 (四六) | 八年 | 1 (一〇五) |
| 六年 | 1 (九〇) | 三年 | 0 (五三) | 九年 | 6 (二四六) |
| 七年 | 3 (六九) | 四年 | 0 (三〇) | 十年 | 4 (九一) |
| 八年 | 2 (一〇) | 五年 | 0 (七九) | 合計 | 43 (二五八) |
| 治平三年 | 1 (七) | 六年 | 2 (四七) | | |

（括弧内の漢数字は、その年に作られた詩の総数。年代のないのは、その年の詩が零であるからである。治平三年と四年は、「擊壤集」では区別できないのでひとつにまとめた。また「首尾吟」一百三十五首は正確な制作年代を推定するのが困難なので省略した。）

一般的詩人の通念から考えて、決して少ない数字とはいえない。むしろひとつの言葉がひとりの詩人にこれほど多量に使用されているということは注目に値する。もっとも、邵雍は正統派の詩人ではないが、この点を考慮に入れても、なお熙寧七年における18という数は気になる数字である。何か意味があるのでないか。私が邵雍の「太平」に注目した所以である。以下、例によって「太平」という言葉を使った作品について、年代順に細かく見ていくことにする。

第二節 邵雍の詩における「太平」―「芳草」と「太平」の相関関係

邵雍が『擊壤集』の中で初めて「太平」という言葉を使ったのは、仁宗の嘉祐三年（一〇五〇）、四十八歳、「過潼関」（巻二）と題する詩においてである。

禁密因離乱 禁の密なるは離乱に因り

機閑為太平 機の閑なるは太平為ればなり

山河雖設險 山河 険を設くと雖も

道徳豈容争 道徳 豈に争いを容れんや

不究千一義 千一の義を究めず

空伝百二名 空しく百二の名を伝う

還方久無外 還方 久しく外無し

何復用鷄鳴 何ぞ復た鷄鳴を用いんや

この詩は詩題に「潼関を過ぐ」とあるとおり、潼関（史記）卷七十五「孟賁君列伝」の函谷関のこと。この詩の最後の句「鷄鳴」の故事があったところである。において過去の歴史を回顧した時の感慨である。「千一の義」は、聖人というものは千年に一人出現するかどうかという法則。『揚子法言』卷八「五百」に「或ひと問う、五百歳にして聖人出ず、諸れ有らんか、と。曰く、堯・舜・禹は君臣にして並び、文・武・周公は父子にして処り、湯・孔子は数百歳にして生まる。往に困りて推し来たれば、千一と雖も、（聖人の出現は—引用者）知る可からざるなり、と」（或問、五百歳而聖人出、有諸。曰、堯舜禹君臣也而並、文武周公父子也而処、湯・孔子数百歳而生。因往以推來、雖千一、不可知也。「百一の名色」は、二万の兵士で百万の敵兵を防ぐことができる堅固な地をもつという評判。『史記』卷八「高祖本紀」に「秦は形勝の国なり。河山の險を帯び、鼎（懸）隔すること千里、戟を持つもの百万、秦は百一を得たり」（秦、形勝之國。帶河山之險、鼎隔千里、持戟百万、秦得百一。右の典故の運用に見られるように、邵雍は軍國主義を排して、徳治主義の政治を主張するのである。また最後の一聯「還方 久しく外無し、何ぞ復た鷄鳴を用いんや」は、五代の分裂状態を收拾した現在、全中国は平和に統一されている故、関所を前にして鷄鳴の策など弄する必要はないといっているのであるが、冒頭の一聯「禁の密なるは離乱に困り、機（機弩などの道具）の閑なるは太平為ればなり」は、「太平」というものの一般的性質を述べたのであって、直接に「太平」を謳歌したのではない。

先程の太平表を見ればわかるとおり、翌年の嘉祐四年（一〇五五）と五年（一〇五六）には「太平」を詠んだ作品はなく（嘉祐四年は詩が一首もない）、嘉祐三年に続くのは、嘉祐六年（一〇五六）、五十一歳の時。この時「送王伯初学士赴北京機宜」(卷二)と題する詩を作り、次のように歌っている。

丈夫志氣蓋棺定 丈夫の志氣は棺を蓋いて定まる

自有雄圖繫重輕 自ら雄圖有り 重輕に繫る

去路不能無感旧 路を去れば 旧に感ずる無きこと能わず

到官争忍便忘情 官に到れば 争でか忍んで便ち情を忘れん

閑時語話貴精密 閑時の語話 精密を貴び

先事経営在太平 先事の経営 太平に在り

誰謂禦戎無上策 誰か謂う 戎を禦ぐに上策無しと

伐人謀処不須兵 人を伐たんと謀る処 兵を須いざれ

「閑時の語話 精密を貴び、先事の経営 太平に在り」、これも官吏の義務は何よりも兵器を用いることなく「太平」世界を建設すること、これこそ上策であるということをも、一般的に述べたものである。明の呉泰は『宋邵康節先生伊川擊壤集』(卷之八)の「増註」において、次のように説明した。「万人の命、一人に繫り、機、蜜ならざれば則ち害成る。「閑時の語話 精密を貴」べば、戎器を除き、不虞を戒む。「先事の経営 太平に在」れば、雄圖は既に壮にして、外自ら威嚴あり。先声して人の氣を奪えば、不軌の謀は旋ち消ゆ。官に余情有りて、民に鋒鏑無きは、策の上なり」(万人の命、繫於一人、機不密則害成。閑時語話貴精密、除戎器、戒不虞。先事経営在太平、雄圖既壯、外自威嚴。先声奪人之氣、不軌之謀旋消。官有余漬、民無鋒鏑、策之上也)。「閑時」の一聯は、王伯初に対するはなむけの言葉である。邵雍が一般論としてではなく、彼の時代を指して「太平」であると述べるのは、嘉祐七年(一〇六六)、五十二歳の時に作られた「書事吟」(卷四)においてである。「書事吟」は次のような作品である。

天地有常理 天地 常理有り

日月無遁行 日月 遁行無し

飽食高眠外 飽食と高眠の外は

率是皆虛名 率ね是れ皆な虛名なり

雖乏伊呂才 伊呂の才に乏しと雖も

不失堯舜氓 堯舜の氓たるを失せず

何須身作相 何ぞ須いん 身 相と作り

然後為太平 然る後 太平と為すを

第六句の「氓」は、見なれない文字だが、「氓」と同じ音訓の文字であろう。『広韻』卷一「下平十三耕」に「氓、莫耕の切。民なり」。亡偏を避けて土偏に書くところに『擊壤集』の作者としての一種のプライドが感ぜられる。それはともかく最後の一聯は、「堯舜の氓たる」己れはこの世の「太平」を謳歌している、というところである。この年、洛陽の長官・王宣徽（本名は拱辰、字は君睨。一〇三二—一〇八七。宣徽北院使に除せられたことがある。『宋史』卷三百一十八本伝）の斡旋によって、邵雍が一旦落ち着くことになった屋敷が完成している（注6）。彼がこの世界を「太平」と感じるためには、何よりもまず彼の居住地の確保と安定が必要であったのであろうか。「居必ず常に安らかにして、然る後に樂しみを求むれば、為すこと長ず可く、行うこと久しかる可し」（居必常安、然後求樂、為可長、行可久。『說苑』卷二十「反質」。「墨子佚文」として『墨子問詁』附録に収録。ただし、注意しなければならないのは、「伊呂の才に乏し」という句である。「伊呂」は殷の功臣・伊尹と、周の功臣・太公望呂尚である。この時の邵雍にはまだ己れの世捨人的生活を外的な（官僚）生活と比較しているところがあり、嘉祐七年、五十二歳の頃の邵雍には、「太平」を歌っていても、彼の心の中に驕りが無いわけではなかった。「太平」を享受することはできても、「太平」の建設に参与することはできないという引っかけかりである。

続いて嘉祐八年（一〇六六）、五十三歳の作「後園即事三首・其の一」（卷五）

太平身老復何憂 太平に身は老い 復た何をか憂えん

景愛家園自在遊 家園を景愛し 自在に遊ぶ

幾樹綠楊陰乍合 幾樹の綠楊 陰りて乍ち合し

数声幽鳥語方休 数声の幽鳥 語りて方に休む

竹侵旧径高低迳 竹は旧径を侵して 高低に迳り

水滿春渠左右流 水は春渠に満ちて 左右に流る

借問主人何似樂 借問す 主人 何似なる樂しみぞと

答云殊不異封侯 答えて云う 殊に封侯に異ならずと

冒頭の一聯「太平に身は老い 復た何をか憂えん、家園を景愛し 自在に遊ぶ」のみを読めば、彼は何のためらいもなく、いかにも「太平」を謳歌しているかのように見える（「景」慕うの意味であろう）。しかし、この詩の最後の一聯「借問す 主人 何似なる樂しみぞと、答えて云う 殊に封侯に異ならずと」である。前稿（13頁）で指摘したとおり、この詩を作ったとき、邵雍はまだ地上の仙界という思想を見いだしていなかった。やはりまだ「封侯」という外的名譽の束縛から脱してはいないのである。

更に続いて治平三年（一〇六六）、五十六歳の時に作られた「登嵩頂」（卷五）において、彼は次のように歌った。

九州環遶持棊平 九州 環遶し 棊を持して平かなり

万歳嵩高看太平 万歳 嵩高 太平を見る

四海有人能統御 四海 人有り 能く統御し

中原何復有咬争 中原 何ぞ復た咬争すること有らん

長憂眼見姦雄輩 長に憂う 眼のあたりに姦雄の輩を見んことを

且願身為堯舜氓 且くは願う 身 堯舜の氓為らんことを

五十二年燕没事 五十二年 燕没の事

如今方喜看春耕 如今 方に喜ぶ 春耕を看るを

この詩は高(高)山から眺望した光景と、その時の感慨を詠じたものである。邵雍は五十二年間の五代の混乱の後、今では中原がよく統御されていることに喜びを感じてはいるが、なお「長に憂う 眼のあたりに姦雄の輩を見んことを」と表現されている点は、やはり注意すべきである。「姦雄の輩」が具体的にどのような人物を指しているのか不明だが(この年、対外的には正月癸酉18日、契丹が国号を大遼と改め、九月庚辰29日、西夏が大順城(甘肅省慶陽県北)に侵攻、また宋の朝廷内では英宗の父親・濮王の称号をめぐって、皇親と呼ぶべきか、それとも皇伯と呼ぶべきか、正月の間中紛糾していた。いわゆる濮議。『統資治通鑑長編』巻二百七)、この詩が作られた治平三年、五十六歳、邵雍は「擊壤集序」の中で、「擊壤集は、伊川翁自ら楽しむの詩なり、唯だ自ら楽しむのみに非ず、又た能く時と万物の自得とを楽しむなり」と述べているけれども、この時点では彼にはなお「太平」を謳歌し切れない不安があったと思われる。

治平三年(一〇六六)の後に続くのは、三年後の熙寧二年(一〇七〇)、五十九歳の時である。この時には三首の詩に四度でてくる。この三首のうちの先ず「初夏閑吟」(巻六)。

緑楊深処囀流鶯 緑楊 深き処 流鶯囀る

鶯語猶能喜太平 鶯語すら猶お能く太平を喜ぶ

人享永年非不幸 人の永年を享くるは不幸に非ず

天生珍物豈無情 天の珍物を生むは豈に情無からんや

牡丹謝後紫桜熟 牡丹 謝りし後 紫桜熟し

芍薬開時斑笋生 芍薬 開く時 斑笋生ず

林下一般閑富貴 林下 一般 閑かなる富貴

何嘗更肯讓公卿 何ぞ嘗て更に背て公卿に譲らん

冒頭の一聯「緑楊 深き処 流鶯囀る、鶯語すら猶お能く太平を喜ぶ」、邵雍はウグイスの鳴き声にも「太平」を感じているが、やはり最後の一聯に「富貴」、「公卿」(大臣) という言葉が使われている点である。この時点でもまだ己れの生活を他のものと比較しようとする意識があるのである。

もっとも、同じ年の「東軒消梅初開、勸客酒」二首・其の二(卷六)と「清風短吟」(卷六)には、それぞれ次のように歌われている。

春色融融滿洛城 春色 融融として洛城に満つ

莫辞行樂慰平生 辞する莫かれ 行樂して平生を慰むるを

深思閑友開眉笑 深く思う 閑友の眉を開いて笑うを

重惜梅花照眼明 重ねて惜しむ 梅花の眼を照らして明かなるを

況是山翁尤好事 況んや是れ 山翁 尤も好事なるをや

可憐芳酒最多情 憐む可し 芳酒 最も多情なるを

此時不向樽前醉 此の時 樽前に向かいて酔わずんば

更向何時醉太平 更に何れの時に向かいてか太平に酔わん

清風興況未全衰 清風 興況 未だ全くは衰えず

豈謂天心便棄遺 豈に天心 便ち棄遺すと謂わんや

長具齋莊緣読易 長に齋莊を具すは易を読むに縁り

毎慚疎散為吟詩 毎に疎散を慚じ為に詩を吟ず

人間好景皆輪眼 人間の好景 皆な眼に輪し

世上閑愁不到眉 世上の閑愁 眉に到らず

生長太平無事日 生まれ長ず 太平 無事の日

又還身老太平時 又た還た身は老ゆ 太平の時

この二つの詩には「伊呂」も「封侯」も「姦雄」も「公卿」も出てこない。「此の時 樽前に向かいて酔わずんば、更に何れの時に向かいてか太平に酔わん」、「生まれ長ず 太平 無事の日、又た還た身は老ゆ 太平の時」、邵雍はひたすら己れの「太平」を楽しみ始めていることは否定できない。明らかに質的といつてよい違いが見えるのである。

ここで邵雍の「芳草」である。前稿において述べたとおり、邵雍がこの地上を仙界と考え、「芳草」を仙界を彩る光景と考えたのは、彼が五十九歳から六十歳にかけての頃であった。そして邵雍がこの地上の世界は「太平」であると感じ、ひたすら己れの「太平」を歌い始めるのも五十九歳の頃である。考えてみればきわめて当然のことであるが、仙界の「芳草」発見と地上の「太平」謳歌とは、彼の個人的なレヴェルにおいて相関関係にある。「芳草」同様、「太平」という言葉を通してみても、五十九歳から六十歳にかけては、邵雍の生涯におけるひとつの思想的到達であるといえるのである。ただ「太平」に特徴的なことは、太平表を見ればわかるとおり、熙寧二年の後は熙寧六年に至るまで「太平」はまったく歌われることがない、それが熙寧七年になるとにわかに活発に歌われているということである。かくて次の二つの問題が生じる。

(一)、熙寧二年にこの世を「太平」と感じ、ひたすら己れの「太平」を謳歌し始めているにもかかわらず、その後の熙寧三年・四年・五年の三年間には一首も「太平」を詠じた作品がない

(二)、熙寧六年になって「太平」が復活し、更に熙寧七年の一年間は、他の時期を圧倒して多量に歌われている

のはなぜかという問題である。(一)の熙寧七年に多量に歌われていることについては、この一年が彼の文学生活において最も多作の年であったということも関係しているであろうが、それにしても(二)の熙寧三年・四年・五年に合せて百五十九首も作られているのに、「太平」がひとつも歌われていないことを考えると、何か異常なものを感じる。これはどういうことであるうか。節をあらためてこの点について、当時の政治状況つまり新法とのかかわりを視野に入れて考えてみることにする。

第三節 なぜ「太平」を歌わなかったのか—邵雍の新法批判

まず最初の問題、邵雍はなぜ熙寧三年・四年・五年に「太平」を歌わなかったのか。邵雍が挙業を中途で放棄し、官吏への道を断念したのは、彼自身の見解では、前稿の注5に指摘しておいたとおり、「道は其れ是に在り」(道其在是矣)と悟ったからである。しかしそのような彼も、当時の政治の動向とまったく関係がなかったというわけではない。彼がいわゆる旧法党のメンバーである富弼や司馬光たちと密接な関係にあったことは、彼らと邵雍との間で何度も唱和詩が作られていることから一目瞭然である。更に『邵氏見聞録』(卷十九)に次のような有名なくだりがある。

熙寧三年(1072)四月、朝廷 初めて新法を行う。遣わす所の使者、皆な新進の少年、事に遇いて風生じ、天下騒然たり、州県 始めより為すべからず。康節先公、林下に閑居するに、門生・故旧の四方に仕宦せる者、皆な効を投じて帰らんと欲し、書を以て康節先公に問う。康節先公、答えて曰く、正に賢者の当に力を尽くすべき所の時なり。新法固より嚴なるも、能く一分を寛すれば、即ち民は一分の賜を受けん。効を投じて去るとも、何の益あらん、と。嗚呼、康節先公は深く世務に達し、沾沾を以て虚名を取らざること此の如し。世の謂う所の康節先公を隠者と為す者は、非なり。(熙寧三年四月、朝廷初行新法。所遣使者、皆新進少年、偶事風生、天下騒然、州県始不

可為矣。康節先公閑居林下、門生故旧仕宦四方者、皆欲投劾而帰、以書問康節先公。康節先公答曰、正賢者所當尽力之時。新法固嚴、能寬一分、即民受一分之賜矣。投劾而去、何益。嗚呼、康節先公深達世務、不以沽激取虛名如此。世所謂康節先公為隱者、非也。

上野日出刀氏は、「雍は彼等（富弼・司馬光・呂公著など）引用者）の風雅の友であるだけでなく、これら所謂舊法黨に屬する人々の政治顧問的存在ではなかったかと思われるふしがある」（注7）とさえ言われた。彼には一種のカリスマ的ところがあつたのであろうか。

右に引用した『邵氏見聞録』の冒頭に「熙寧三年（1070）四月、朝廷 初めて新法を行う」と記されていたが、邵雍はこの年、早くも新法に対して不平を漏らしている。

自從新法行 新法の行われて自從り

嘗苦樽無酒 嘗つゝに樽に酒無きに苦しむ

每有賓朋至 賓朋の至るもの有る毎に

尽日閑相守 尽日 閑かに相守る

必欲丐于人 人に丐わんと必欲ほつするも

交親自無有 交親 自ら有ること無し

必欲典衣買 衣を典して買わんと必欲ほつするも

焉能得長久 焉んぞ能く長久を得ん

これは、「無酒吟」（卷七）と題する詩である。酒のために質屋通いをしなければならぬ、しかしこれにも限度があるなど生活の窮状を訴えているのだが、「新法が行われて自從り、嘗つゝに樽に酒無きに苦しむ」、新法に対する名指しの批判である。

更に「奉和十月二十四日、初見雪、呈相國元老」(十月二十四日、初めて雪を見るに和し奉り、相國元老に呈す)(巻九)と題する詩においても、名指しで新法批判がなされている。この詩は、富弼の「十月二十四日、早始見雪、登白雲台、閑望乱道、走書呈堯夫先生」(十月二十四日、早くも初めて雪を見れば、白雲台に登りて、乱道を閑望し、走り書きして堯夫先生に呈す)と題する詩に答えた作であり、熙寧五年壬子(一〇七三)、六十二歳の時である。先ず富弼の作。

氣候隨時応 氣候 時に隨いて応じ

初寒雪已盈 初寒に 雪 已に盈つ

「乾坤一色白 乾坤 一色に白く

山水万重清 山水 万重に清し

是処人煙合 是る処 人煙合し

無窮鳥雀驚 無窮に鳥雀驚く

忻然不成下 忻然として下るを成さず

連把玉疊傾 連りに玉疊を把って傾く

次に邵雍の作。

壬子初逢雪 壬子 初めて雪に逢うも

未多仍却晴 未だ多からずして仍お却って晴る

人間都變白 人間 都て 白に變り

林下不勝清 林下 清きに勝えず

寒士痛遭恐 寒士は恐れに遭うを痛み

窮民惡着驚 窮民は驚きに着うを惡む

盃觴限新法

盃觴は新法に限らるれば

何故便能傾

何故に便ち能く傾けん

邵雍は富弼の「連りに玉鬘を把って傾く」の句を受けて、「盃觴は新法に限らるれば、何故に便ち能く傾けん」、自分が盃觴にあずかれないのは新法のためであると批判して、富弼に返杯しているのである。ユーモアにまぎれて穏やかな批判になっているが、面白いのは、当時の旧法党の大物のひとり、富弼の詩には、新法を批判する言葉がないばかりか、その口吻すら感じられないのに、邵雍の詩には名指して新法に対する批判がなされていることである。新法が施行されることによって、邵雍の生活が酒にも事欠くほど脅かされることになったのは（この詩の場合、単なるレトリックであって、富弼に酒をよこせと要求しているにすぎないのかもしれないが）、彼の門下生や故旧で官吏になったものも多くが旧法党に共鳴する人々であったために、おそらく邵雍も何らかの弾圧を受けたためであろう（注8）。先程引用した「無酒吟」の直前に「無題吟」（巻七）と題する詩があり、次のように歌われている。

昔日不鍊物

昔日 物を鍊らず

嘗為物所誤

嘗て物の誤る所と為る

今日不鍊人

今日 人を鍊らず

又為人所怒

又た人の怒る所と為る

物誤亦可辨

物の誤るは亦た辨ず可けれども

人怒難往訴

人の怒るは往きて訴え難し

我对人称過

我对うれば 人は過つと称す

人亦為我恕

人も亦た我が為に恕せ

この詩に何度も「人」という言葉が使われているのは、からかい半分の気持ちの現れであり、「人を鍊る」という

珍しい表現も彼独特の諸譎であって、他人の心をあれこれこね回して付度するというような意味であろう。さて「人を鍊らず」、その結果、「人の怒る所と為」ったというのは、この詩からは具体的なことは何もわからないけれども、新法派の官僚から何らかの譴責を受けたことを指すと思われる。実際、右の詩が書かれた時より後のことであるが、彼の生活に不愉快な事件が起こった。『聞見録』（巻十八）によれば、熙寧の初め「買官田の法」が施行され、邵雍の邸宅は官地ということになり出された。三か月の間、競売の看板が立てられていたが、邵雍をばかかって誰も買うものがないが、その後「熙寧七年、司馬光等が金を集めて買ひ与えた」（注9）というのである（熙寧初、行買官田之法。天津之居亦官地。三月、不忍買。諸公曰、使先生之宅他人居之、吾輩蒙恥矣。司馬温公而下、集錢買之）。ただ、『聞見録』の「熙寧初」の記述がどこまで指すのか明瞭でないが、邵雍の屋敷に対して「買官田法」が実行されたのは、おそらく熙寧七年のことであり、「買官田法」施行後、三か月たつてようやく同年内に人々によって買ひ戻されたということではないだろうか。その理由は、ひとつは、熙寧の初め（正確な数字はわからないが）に施行され、買ひ戻されたのが熙寧七年だとすると、「三月」という言葉が宙に浮いて落ち着かず、それに放置される期間が余りにも長過ぎること、もうひとつは、邵雍は熙寧七年にも安樂窩をテーマにした詩「安樂窩中吟十二首」（巻十）を作っていることなどである。

ここで面白いのは、「安樂窩中吟十二首」以後、「天津弊居、蒙諸公共為成買、作詩以謝」（天津の弊居、諸公の共に為に買うを成すを蒙れば、詩を作りて以て謝す）詩（巻十三）まで安樂窩をテーマにした詩はないが、しかし、「天津弊居、蒙諸公共為成買、作詩以謝」以後、数量は少ないが再び「安樂窩銘」（巻十三）、「安樂窩前蒲柳吟」（巻十三）など安樂窩がテーマに歌われていることである。このことから考えると、次に述べることは私の推測だが、「安樂窩中吟」詩を作ってから「天津弊居、蒙諸公共為成買、作詩以謝」詩を作るまでの期間、競売の看板が立っていたのではないだろうか。

いずれにしても、新法による右の処置に対して、邵雍はまったく痛癢を感じなかったとは考えにくい。少なくとも彼の屋敷が司馬光たち二十余家の醸金によって買い戻された時には、彼は感激して感謝の詩を作り、「嘉祐の卜居は終に是れ儲りもの、熙寧（の卜居）は券（登記）を受けて遂に能く専らにす」（嘉祐卜居終是儲、熙寧受券遂能専）と歌っているのである。熙寧三年と熙寧五年の詩に、名指して新法批判がされているのは、熙寧七年の事件のみならず、熙寧七年以前に、新法派から何らかの牽制があったからだと推測されるのである。

熙寧三年・四年・五年の三年間、邵雍はなぜ「太平」を歌わなかったのか。熙寧二年、王安石は參知政事を拝すると農田水利・青苗・均輸、保甲・免役・市易・保馬・方田などの新法を断行していった（『宋史』卷三百二十七「王安石伝」）。そのあるものは、邵雍の生活を脅かすものであった。邵雍がこの間、「太平」を歌わなかったのは、彼一流の新法に対する抵抗であった、と私は考えるのである。

第四節 なぜ「太平」を歌ったのか—邵雍の自己実現

次の問題、邵雍はなぜ熙寧六年になって再び「太平」を歌い始め、翌年熙寧七年になると盛んに「太平」を歌ったのか。結論をいえば、

(一)、第三節において、邵雍が熙寧三年・四年・五年の三年間、「太平」を歌わなかったのは、彼一流の新法に対する抵抗であったといったが、今回は逆に新法に抵抗するためであること

(二)、内的問題として邵雍自身の思想の深化が進んだことである。以下、この二つの点について、具体的に述べていこう。

まず、第一の点。「太平」復活最初の作、熙寧六年に作られた「安樂窩中四長吟」（卷九）を見てみよう。

安楽窩中快活人 安楽窩中 快活の人

閑来四物幸相親 閑来 四物 幸に相親しむ

一編詩逸収花月 一編の詩は逸にして花月を収め

一部書嚴驚鬼神 一部の書は嚴にして鬼神を驚かす

一炷香清冲宇泰 一炷の香は清くして宇泰を冲しくし

一樽酒美湛天真 一樽の酒は美しくして天真を湛う

太平自慶何多也 太平 自ら慶ぶこと何ぞ多きや

唯願君王寿万春 唯だ願う 君王 寿 万春ならんことを

第五句の「宇泰を冲しくす」の意味について、難解であるようなので（注10）私の理解するところを述べておくと、「宇泰」は『莊子』卷二十三「庚桑楚」の「宇泰定者、発乎天光」（宇泰らかに定まる者は、天光を発す）にもとづき、「宇」は器宇の宇つまり心、「泰」は泰然、また「冲」は『冲虚至德真经』という時の「冲」つまり空のことであろう。第五句は、一筋の（「天光」にも等しい）香の煙は心をゆったりとさせ雑念を払い去ってくれる、という意味になる。さて問題は最後の一聯「太平 自ら慶ぶこと何ぞ多きや、唯だ願う 君王 寿 万春ならんことを」である。注意すべきは「君王」という言葉。第二節に引用した「生長す 太平 無事の日、又た還た身は老ゆ 太平の時」（清風短吟）、「緑楊 深き処 流鶯囀る、鶯語すら猶お能く太平を喜ぶ」（初夏閑吟）などと比較すると、神宗皇帝に対する美辞麗句、社交辞令のような印象を受けるのである。このとき彼の意識にあったのは、「君王」つまり神宗皇帝であって、このとき歌った「太平」は、神宗皇帝に捧げる賛歌であると私は考える。同じ熙寧六年の作「年老逢春十三首・其三」（卷十）についても、似たことが言える。

年老逢春雨乍晴 年若い 春に逢い 雨乍ち晴る

雨晴況復近清明 雨晴れ 況んや復た清明に近きをや

天低宮殿初長日 天 宮殿に低る 初めて長き日

風暖園林未囀鶯 風 園林に暖かなり 未だ囀らざる鶯

花似錦時高閣望 花 錦に似たる時 高閣より望め

草如茵処小車行 草 茵の如き処 小車行く

東君見賜何多也 東君 賜わるる 何ぞ多きや

又復人間久太平 又た復た人間 久しく太平なり

この詩には司馬光の唱和詩がある（和堯夫先生年老逢春三首・其二）。

年老逢春無用驚 年老い 春に逢い 驚くを用いる無し

対花弄筆眼猶明 花に對し 筆を弄し 眼は猶お明らかかなり

不嫌貧舍旧來燕 貧舍を嫌わず 旧來の燕

喚起醉眠何処鶯 醉眠を喚起す 何れの処の鶯

一僕相隨幅巾出 一僕 相隨う 幅巾の出づるに

群童聚看小車行 群童 聚り看る 小車の行くを

人間万事都捐去 人間の万事 都て捐て去り

莫遺胸中氣不平 胸中をして氣平らかならざら遣むる莫し

司馬光は最後の一聯で邵雍を讃えて、「人間の万事 都て捐て去り、胸中をして氣平らかならざら遣むる莫し」、邵雍の心の中には不平の種は何もないと詠じ、邵雍の「太平」を邵雍の「胸中」の問題としたが、邵雍詩の最後の一聯「東君 賜わるる 何ぞ多きや、又た復た人間 久しく太平なり」は、「太平」は当局者の政治によるのではなく「東

君」のおかげである、とことさらに主張しているように読めるのである。「東君」は太陽神、春の恵みの神のこと。邵雍がこの詩を作ったとき、新法に反対した司馬光は洛陽に閑居しており、邵雍には「太平」をおおらかに歌うにはまだ旧法党に対する配慮が強すぎたのではないだろうか（司馬光の詩文集『温国文正司馬公集』（卷十二）には「又和來韻」となっており、邵雍はわざわざ司馬光に詩を送ったのであろう）。

以上に述べたことは、邵雍自身はこの世界を「太平」と感じていたけれども、新法がまだ精力的に推進されている熙寧六年のこの時、邵雍にとってこの世をすなおに「太平」と謳歌するには抵抗があったということである。それに対して熙寧七年の詩である。

歛喜又歛喜 歛喜し又た歛喜し

喜歛更喜歛 喜歛し更に喜歛す

吉士為我友 吉士は我が友為り

好景為我觀 好景は我が觀為り

美酒為我飲 美酒は我が飲為り

美食為我餐 美食は我が餐為り

此身生長老 此の身 生まれて長じて老ゆる

尽在太平間 尽く太平の間に在り

これは、「歛喜吟」（卷十）と題する詩である。「吉士」の中には司馬光なども含まれているであろうが、「安樂窩中四長吟」や「年老逢春十三首・其三」に見られたような遠慮はない。熙寧六年と熙寧七年の「太平」の違いの原因は何か。熙寧七年の四月、王安石が同中書門下平章事を一旦やめて中央から退き、知江寧府となったこと（『宋史』卷十五「神宗二」、つまり王安石の新法にも行きつづまりが明らかになってきた、ということがまず考えられるのではない

だろうか。ただし、熙寧七年の「太平」がすべて王安石退陣後に作られたという確証はない。おそらく王安石に対する批判は熙寧七年を頂点として徐々に高まっていったのであり、邵雍の耳にも中央の情報が入っていたのではないかと想像される。

右述したことと関連しておもしろいことがある。第三節において、「次に述べることは私の推測だが」と断わった上で、「『安樂窩中吟』詩を作ってから『天津弊居、蒙諸公共為成買、作詩以謝』詩を作るまでの間、競売の看板が立っていたのではないだろうか」と述べた。つまりこの期間、邵雍はまともに新法の弾圧を食らっていた。ここで推測の上に更に推測を重ねることになるのだが、『擊壤集』が製作年のみならず製作日まで時間的に配列されているならば、熙寧七年の作品に十八回「太平」という言葉が出てくるが、そのうち十一回が「安樂窩中吟」詩を作ってから「天津弊居、蒙諸公共為成買、作詩以謝」詩を作るまでの間の作品なのである。つまり邵雍はまともに新法の弾圧を食らっていた最中に、最も多く「太平」を歌ったということになる。重ねて言うが、これはあくまでも私の推測の域を出ない。しかし、邵雍にも意外と俗人臭いところもあったものではあるまいか。このことの証拠になるかどうか、確信はないけれども、詩を一首紹介しておこう。題して「旋風吟二首・其一」（巻十一）。

安有太平人不平 安んぞ太平有りて 人平かならざる

人心平処固無争 人心 平かな処 固より争い無し

棊中機械不願看 棊中の機械 看るを願わず

琴裏語言時喜聽 琴裏の語言 時に聴くを喜ぶ

少日掛心唯帝典 少日 心に掛けしは唯だ帝典

老年留意只義經 老年 意に留むるは只だ義經

自知別得收功処 自ら知る 別に功を収むる処を得たるを

松桂隆冬始見青 松柱 隆冬に初めて青を見る

「安んぞ太平有りて 人平かならざる、人心 平かな処 固より争い無し」、「自ら知る 別に功を収むる処を得たるを、松桂 隆冬に始めて青を見る」を邵雍のやせ我慢と見るのは、通俗にすぎるであろうか。

いずれにしても、熙寧七年における「太平」謳歌が意味することは、邵雍の個人的な哲学にとどまるものではない。邵雍にとって客観的にはどうであろうとも、主観的にはこの世界は「太平」である。ところが既にこの世界は「太平」であるにもかかわらず、この上になお改革をおこなおうとする人間がいる。いったい何を改革する必要があるのか。ここまで書いて、私は通俗小説「拗相公」(『京本通俗小説』巻十四)を思い出した。「五葉 明良にして太平を致す、相公(王安石を指す)何事ぞ 苦しんで紛更するは」(五葉明良致太平、相公何事苦紛更)。一道侶が壁に題した詩の冒頭の一聯である。一見、新法の改革と関係のないところで「太平」を謳歌しているように見えて、実は邵雍が平然と「太平」を謳歌していたとき、彼の心の中には新法批判という意図があったのではないだろうか、と「拗相公」の作者ならずとも、疑ってみたくなるというものである。邵雍と王安石の関係については第五節において述べるとして、実際、熙寧七年、邵雍は「太平」を歌いながら、もう一方では当時の社会を明らかに批判したと思われる詩を作っているのである。この年の年末に作られたと推定される「感雪吟」(巻十四)で、次のように歌われている。

昏酒嘉肴与管絃 昏酒と嘉肴と管絃と

通宵鼎沸楽豊年 通宵 鼎沸きて 豊年を楽しむ

侯門深处還知否 侯門 深き処 還た知るや否や

百万流民在露天 百万の流民 露天に在るを

「豊年の冬には、必ず積雪有り」(逸詩)注11)という言い伝えがあるが、この詩に歌われている「侯門」が、このとき王安石は中央の舞台からは退いていたけれども、王安石およびその一党を指すことはまず間違いない。もう一例、

熙寧七年に作られた「安樂高銘」(卷十三)と題する作品を引用しておこう。

安莫安于王政平 安きは王政の平かなるより安きは莫し

樂莫樂于年穀登 樂しきは年穀の登るより樂しきは莫し

王政不平年不登 王政 平らかならず 年 登らざれば

窩中何由得康寧 窩中 何に由りてか康寧を得ん

この詩の「安きは王政の平らかなるより安きは莫し」に対して、呉泰は「外舒やかなれば即ち内は寧か、民憂うれば即ち己は戚む。内外一致、人己一体、樂しむに天下を以てすれば、安きこと盤石の如し」と、一般論の形で説明したが、『宋邵康節先生伊川擊壤集』(卷之二)の「増註」に、当時の現実を目を向けるとき、「王政 平らかならず」が新法を指すからには、「樂しきは年穀の登るより樂しきは莫し」と邵雍が詠じたのは、具体的にいかなる事態を指しているのかわからないけれども、何か「年(穀)登らざ」る事態が現実が発生したからに違いない、と私は推測している(注12)。そしてその責任は、当然「王政 平らかならず」ざる事態を引き起こした者として「王政」の担当者、王安石たちに帰せられるのである。

次に第二の点。邵雍の生活に目を転じると、第三節で述べた通り、熙寧七年、競売に出されていた彼の邸宅が、「司馬光等が金を集めて買ひ与え」られた。時間をさかのぼって嘉祐七年(1056)、五十二歳、洛陽の尹・王宣徽の世話によって邸宅が提供されたとき、邵雍は「天津新居成、謝府尹王君脱尚書」詩(天津の新居成り、府尹王君脱尚書の謝す)(卷四)を作ったが、この詩において彼は

無才濟天下 天下を濟う才無かれども

有分樂年豊 年豊を樂しむ分有り

と詠じた。この一聯にはある種の後ろめたさのようなものが感じられる。それに対して、熙寧七年の「天津弊居、蒙

諸公共為成買、作詩以謝」詩（卷十三）には、

洞号長生宜有主 洞は長生と号す 宜しく主有るべく

窩名安樂豈無權 窩は安樂と名づく 豈に權無からんや

と歌われているとおり、後ろめたさのような感情はまったくないといつてよい。それどころか彼は、誰にはばかることもなく、彼の存在の正当性を声高に主張しているとさえいえる。「窩は安樂と名づく 豈に權無からんや」は、この住まいはワシのもじやという宣言にほかならない。この宣言の背後には、第一点として先に述べた新法の行きづまり、呂惠卿の専横に見られる新法派内部における分裂など（注13）当時の政治状況の変化と共に、悟りを開いた人間としての自信があつたのではないだろうか。前稿で論じたとおり、邵雍は、熙寧三年頃、ある種の悟りを得た。その後三年間、「太平」を歌わなかつたことについては前節で述べた。この間、邵雍は何をしていたのだろうか。おそらく思想の深化、自己研鑽のために己れの内面と向かい合つていたのではあるまいか。この間の経緯をもっともよく表している作品のひとつは、熙寧五年（一〇七三）、六十二歳の時に作られた「人生一世吟」（卷九）である。

前有億万年 前に億万年有り

後有億万年 後に億万年有り

中間一百年 中間の一百年

做得幾何事 幾何の事を做し得んや

又況人之寿 又た況んや人の寿

幾人能百歳 幾人が能く百歳なるをや

如何不喜歡 如何ぞ喜歡よろこばずして

強自生憔悴 強いて自ら憔悴を生ずるや

「前に億万年有り、後に億万年有り」、大局的にもその目を持っていた邵雍には人々が「憔悴」するのは、「強いて」のことに映るのであり、それは愚かしいことに思えるのである。「強いて」する行為を取ってしまえば、「喜欲」以外に何も無い。気の遠くなるような宇宙時間（注14）の流れから見れば、「人の生はわずかに一生」、「喜欲」するにしくはない。前稿の第四節（21頁）において、私は次のように記した。「熙寧五年（一〇三三）、六十二歳以後、この地上こそ仙界であるという思想は少しも動揺することがなかった」。新法の施行は彼の生活にも余波が及んだが、彼は完全に悟りすましていたのである。繰り返しになるが、すでに先人が述べられているとおり、邵雍も「官吏として経世の才を振う」（注15）壮志を抱いていた。『宋史』（巻四百二十七）本伝の記述を引用すれば、「雍少時、自ら其の才を雄とし、慷慨して功名を樹てんと欲す。書において読まざる所無く、始めて学を為すや、即ち堅苦刻厲し、寒きにも爐せず、暑きにも扇せず、夜席に就かざる者数年なりき」（雍少時、自雄其才、慷慨欲樹功名。於書無所不誦、始為学、即堅苦刻厲、寒不爐、暑不扇、夜不就席者数年）。しかしその後彼は「道は其れ是に在り」と悟って、官吏への道は放棄した。それに代わって彼が選んだ道は、「内聖」（『宋史』本伝）への道であった。それは、近代的な言い方をすれば、自己実現の道とでもいえようか。そして彼はおそらくそれに成功した。その証拠が三年間の沈黙を経た後、熙寧七年になっておびただしく歌われた「太平」賛歌である、と私は考えるのである。しかも熙寧二年の時に歌われた「太平」と、熙寧七年の「太平」とはうたいぶりに明らかな違いがある。比較の便宜のためにここにもう一度、熙寧二年の作品の中から、「東軒消梅初開、勸客酒」一首・其二（巻六）を引用しておこう。

春色融融滿洛城 春色 融融として洛城に満つ

莫辞行樂慰平生 辞する莫かれ 行樂して平生を慰むるを

深恩閑友開眉笑 深く思う 閑友の眉を開いて笑うを

重惜梅花照眼明 重ねて惜しむ 梅花の眼を照らして明かなるを

況は山翁尤好事 況んや是れ 山翁 尤も好事なるをや

可憐芳酒最多情 憐む可し 芳酒 最も多情なるを

此時不向樽前醉 此の時 樽前に向かいて酔わずんば

更向何時醉太平 更に何れの時に向かいてか太平に酔わん

次に熙寧七年の作品のうち、やはりもう一度「欲喜吟」(卷十)を見てみよう。

欲喜又欲喜 欲喜し又欲喜し

喜欲更喜欲 喜欲し更に喜欲す

吉士為我友 吉士は我が友為り

好景為我觀 好景は我が觀為り

美酒為我飲 美酒は我が飲為り

美食為我餐 美食は我が餐為り

此身生長老 此の身 生まれて長じて老ゆる

尽在太平間 尽く太平の間に在り

熙寧二年の「東軒消梅初開、勸客酒(東軒の消梅初めて開き、客に酒を勧む)二首・其の二」と熙寧七年の「欲喜吟」とは、どこがどう違うのか。一言でいえば熙寧二年の作は、「冗舌と感じられるほど表現がくどいのに対して、熙寧七年の作は、よけいなものは取り去ってすっきりしている、という違いである。邵雍の「無名君伝」中の言葉を用いるれば、「滓」の量の多寡の違いということになる。作品に即して具体的に見れば、「此の時 樽前に向かいて酔わずんば、更に何れの時に向かいてか太平に酔わん」に対して、「美酒は我が飲為り、美食は我が餐為り」である。七言詩と五言詩という字数の差異を越えて、この両詩のあいだには質的な違いあると感じられるのである。このことは、わ

ずか四年という短い時間であるが、熙寧七年にいたっては邵雍は、思想的に一層深化したということを意味するのではないだろうか。

以上が第二点である。以下、熙寧七年の作品のいくつかを引用しておこう。

「年平吟」(卷十二)

身老太平間 身は老ゆ 太平の間

身閑心更閑 身は閑かにして心は更に閑かなり

非貴亦非賤 貴に非ず亦た賤に非ず

不飢兼不寒 飢えず兼ねて寒からず

有資須置酒 資有れば須く置酒すべし

無日不開顔 日として顔を開かざるは無し

第一條平路 第一に條は平路

何人伴往還 何人か往還に伴う

「白頭吟」(卷十二)

五福雖難備 五福は備わり難しと雖も

三殤却不逢 三殤は却って逢わず

太平無事日 太平 無事の日

得作白頭翁 白頭翁と作るを得たり

「四事吟」(卷十三)

会有四不赴 会に四不赴有り

時有四不出 時に四不出有り

無貴亦無賤 貴無く亦た賤無く

無固亦無必 固無く亦た必無し

里閑閑過從 里閑 閑かに過ぎ従い

身安心自逸 身は安らかにして 心は自ら逸なり

如此三十年 此の如く三十年

幸逢太平日 幸に太平の日に逢う

「身は老ゆ 太平の間、身は閑かにして心は更に閑かなり」といい、「太平 無事の日、白頭翁と作るを得たり」といい、「里閑 閑かに過ぎ従い、身は安く心は自ら逸なり。此の如く三十年、幸に太平の日に逢う」というごとく、すべてもっぱら己れ一人の「太平」を楽しんでいるといえる。

第五節 邵雍と王安石—君臣論をめぐって

邵雍は確かに自己実現に成功した。彼が生きていた時代は「太平」であったという、熙寧七年における彼の執拗な表明は、彼の自己実現が成功したことの証しにほかならない。それは個人的な自己満足にとどまるものではない。旧法党のメンバーに敬慕されたという事実からうかがえるように、彼に好意を寄せる人々が等しく認めるものであった。『宋史』本伝に次のように記されている。

司馬光 雍に兄事し、而して二人の純徳 尤も郷里の慕嚮する所なり。父子昆弟 毎に相飭めて曰く、不善を為す母れ。恐らく司馬端明・邵先生の知るところとならん、と。士の洛に道する者、公府に之かざるも、必ず雍に

之く有り。(司馬光兄事雍、而一人純德尤鄉里所慕嚮。父子昆弟每相飭曰、毋為不善。恐司馬端明邵先生知。士之道落者、有不之公府、必之雍)。

彼はまた名譽を求める人であり(注16)、この点でも彼の人生は十分満足できるものであった。

ところで邵雍はなぜ王安石の新法に批判的であったのだろうか。王安石の思想と邵雍の思想との間に、根本的な点において相容れないものがあつたからと考えるのがまず常識的な判断であろう。私は中国の政治や哲学に疎いので、ここでは私が気づいた君臣という問題をめぐって、兩人の考えを簡単に紹介しておこう。王安石に陶淵明の「桃花源の記」を下敷きにした作品「桃源行」(『臨川先生文集』巻四)と題する作品があり、この中に次のような一聯がある。

兒孫生長与世隔 兒孫 生まれ長じて世と隔たり

雖有父子無君臣 父子有りと雖も君臣無し

この一聯の後半の句に対して、清水茂氏は「王安石が、桃花源のユートピアの一つの性格に「無君臣」を考えていたのだとすれば、きわめて注目すべき思想である」(注17)と言われた。王安石自身が「夫れ君なる者は、命を制する者なり。命を推してこれを民に致す者は、臣なり」(夫君者、制命者也。推命而致之民者、臣也)、『善救方後序』、『臨川先生文集』巻八十四)と述べているとおり、当時の社会には「無君臣」など現実にはあり得なかつたが(注18)、「善救方後序」を私流に解釈すると、君と臣との違いは、いわば役割分担の違いである。王安石の心の中には、一種の平等な社会を実現したいという政治的ヴィジョンがあつたのではないだろうか。新法がその実践であつたことは言うまでもない。王安石は「上仁宗皇帝言事書」(『臨川先生文集』巻三十九)において、次のように彼の見解を述べた。

先王の時、士の学ぶ所の者は、文武の道なり。士の才に以て公卿大夫と為すべき有り、以て士と為すべき有り。

其の才の大小、宜不宜は則ち有り。武事に至りては、則ち其の才の大小に随いて、未だ学ばざる者有らざるなり。故に其の大なる者は、居れば則ち六官と為り、出でては則ち六軍の將と為るなり。(中略) 故に辺疆、宿衛皆な

士大夫を得て之を為し、而して小人は其の任を奸すを得ず。今の学ぶ者は、以て文武は異事にして、吾は文事を治むるを知ると為すのみ。(先生時、士之所學者、文武之道也。士之才有可以為公卿大夫、有可以為士。其才之大小、宜不真、則有矣。至於武事、則隨其才之大小、未有不學者也。故其大者、居則為六官、出前為六軍之將也。(中略) 故辺疆宿衛、皆得士大夫為之、而小人不得奸其任。今之學者、以為文武異事、吾知治文事而已)

この文章をやはり私なりに解釈すると、人間が持っている能力に高低の差はある。しかし、職種に高低の差があるわけではない(注19)。文官と武官に関する右のような見解は、当時中國の東北部にいた契丹族の遼國と、西北部にいた党項族の西夏に対する単なる防衛上の戦略ではないとすれば、「だれでも平等だという考え」(注20)を抱いている人間でなければ、考え及ばないのではあるまいか。「林下 一般の奇、俗人 那ぞ知るを得ん」(林下一般奇、俗人那ぞ知るを得ん)と、己れは俗人とは違うぞという意識を強く持っていた邵雍には、もちろんこのような思想はまったくなかった。第一節に紹介した「五樂」のひとつは「士人為る」ことであった。

次に邵雍の君臣観である。邵雍は熙寧六年、「安樂窩中一部書」(巻九)と題する作品において、次のように歌った。

安樂窩中一部書 安樂窩中 一部の書

号云皇極意如何 号して皇極と云う 意は如何

春秋礼楽能遺則 春秋・礼・楽 能く則を遺す

父子君臣可廢乎 父子君臣 廢す可けんや

浩浩羲軒開關後 浩浩たる羲軒 開關の後

巍巍堯舜協和初 巍巍たる堯舜 協和の初

炎炎湯武干戈外 炎炎たる湯武 干戈の外

恂恂桓文弓劍余 恂恂たる桓文 弓劍の余

日月星辰高照耀 日月星辰 高く照耀し

皇天帝伯大舖舒 皇天帝伯 大いに舖舒す

幾千百主出規制 幾千百主 規制を出だし

数億万年成楛模 数億万年 楛模を成す

治久便憂強跋扈 治久しければ便ち憂う 強きものの跋扈するを

患深仍念惡驅除 患深ければ仍りに念う 悪しきものを驅除せんと

才堪命世有時有 才の世に命ぜらるるに堪うる 時に有ること有り

智可濟時無世無 智の時を濟う可き 世に無きこと無し

既往尽婦閑指点 既往は尽く閑かに指点するに婦し

未來須俟別支吾 未來は須らく別に支吾するを俟つべし

不知道化誰為主 知らず 造化 誰をか主と為さんとして

生得許多奇丈夫 許多の奇丈夫を生み得たるを

この詩は彼の大著『皇極經世書』の中の「観物内篇之六」に述べられている思想を詩的に表現したものであり、第三句と第四句に「春秋・礼・樂 能く則を遺す、父子君臣 廢す可けんや」と歌われているとおり、邵雍にとって君臣は犯すことのできない絶対的關係であった。彼は『皇極經世書』において、『論語』「顔淵」篇の一節「齊の景公 政を孔子に問う。孔子對えて曰く、君は君たり、臣は臣たり。父は父たり、子は子たり」（斉景公問政於孔子。孔子對曰、君君、臣臣。父父、子子）を引用した後、戦国時代の分裂は、この君臣關係の紊乱によると批判した。邵雍にとって「君は君たり、臣は臣たり」は、「父は父たり、子は子たり」と同様、人間社会が存立するための絶対的テーゼであった。

このように君臣という問題に関して両者は根本的に違っていた、というより当時の思想界の状況から考えて王安石がひとり突出していたというべきであるが（朱子は『論語』の「君、君、臣、臣。父、父、子、子」に対して「此人道之大經、政事之根本也」と説明した（『論語集注』）。右の「安樂窩中一部書」詩についても少し掘り下げて考えてみたい。邵雍は王安石の考え方に対して、本質的なところで容認できなかったが、面白いことに王安石の文学に対しては高く評価していた。

既貪李杜精神好 既に貪る 李杜の精神の好しきを
又愛歐王格韻奇 又た愛す 歐王の格韻の奇なるを

これは邵雍の「首尾吟・其二二四」（卷二十）の一聯である。この詩がいつ作られたのかは、遺憾ながら不明だが、前句の「李杜」が李白と杜甫を指すことは言うまでもない。後句の「歐王」は、趙齊平氏が既に指摘されるとおり（注21）、常識的にいって歐陽脩と王安石以外には考えにくい。「李杜」の「精神」（文学的魂）に対して、「歐王」の「格韻」とは文学的格調を言うのであろうか。ともかく邵雍は、歐陽脩と共に王安石の文学を「格韻の奇なる」ものとして「李杜」と対^{たい}にして評価しているのである。当時の「李杜」に対する評価の高さを思えば、これほど高い賞賛はない。邵雍も王安石の該博な知識と高潔な人格を支えられた文学にはかぶとを脱がざるを得なかったということであらうか。いずれにしても邵雍は王安石の作品を熟知していた。王安石が「桃源行」を歌った時期は、やはり清水茂氏によれば「政治を批判する態度からいって、神宗皇帝に任用された熙寧元年（一〇六〇）以前の作であろう」（注22）。ところで前稿において言及したとおり、邵雍は陶淵明の文学に多大の関心を寄せており、「桃花源の記」からも深い影響を受けていた。とすると、ここから述べることは、ほとんどが私の単なる想像に過ぎないが、次のようなことが言えるのではないか。邵雍は王安石の「桃源行」を興味と関心を持って読んでいた。そして当然、王安石の詩に「父子有り」と雖も「君臣無し」という表現があることも知っていた。しかし、「桃花源」の世界を「無君臣」の世界などと

「いう考えは、地上を仙界と観念する邵雍にとっても、想像さえできることではなかった。しかるに何とこんなことを考える人間がいたのか。」

ここで「安楽窩中一部書」に関して問題が二つ浮かびあがってくる。ひとつは「父子君臣 廢す可けんや」の句、もうひとつは、第十三と第十四の一聯「治久しければ便ち憂う 強きものの跋扈するを、患深ければ仍りに念う 悪しきものを駆除せんと」である。前稿の注14に指摘したように、『皇極經世書』は熙寧三年、六十歳頃に書きあげられたといわれる。このとき彼は「書皇極經世後」(巻八)と題する詩を作った。かなりの長編であるが、ここに全文引用してみよう。

樸散人道立 樸散じて 人道立ち

法始平羲皇 法始まりて 羲皇平かなり

歲月易遷革 歲月は遷革し易く

書伝難考詳 書伝は考詳し難し

二帝啓禪讓 二帝は禪讓を啓き

三王正紀綱 三王は紀綱を正す

五伯杖形勝 五伯は形勝に杖り

七国争強梁 七国は強梁を争う

兩漢驥龍鳳 兩漢は龍鳳を驥らせ

三分走虎狼 三分は虎狼を走らす

西晋擅風流 西晋は風流を擅にし

群凶來北荒 群凶は北荒より來たる

東晋事清芬 東晋は清芬を事とし

伝馨宋齐梁 馨を宋齐梁に伝う

逮陳不足臭 陳に逮んで臭い足らず

江表成悲傷 江表 悲傷を成す

後魏乘晋弊 後魏は晋弊に乗じ

掃除幾小康 掃除して小康に幾し

遷洛未甚久 洛に遷して未だ甚しくは久しからざるに

旋聞東西将 旋ち東西の将を聞く

北齐举燭火 北齐は燭火を挙げ

後周馳星光 後周は星光を馳す

隋能一統之 隋は能く之を一統し

駕福于臣唐 福を臣唐に駕す

五代如伝舎 五代は伝舎の如く

天下徒擾攘 天下は徒らに擾攘す

不有真主出 真主の出づる有らざれば

何由奠中央 何に由りてか中央を奠めん

一万里区字 (字?)

四千年興亡

五百主肇位 五百 主 位を肇め

七十国開疆

七十国 疆を開く

或混同六合

或は六合を混同し

或控制一方

或は一方を控制す

或創業先後

或は業を創めて先後し

或垂祚短長

或は祚を垂れて短長あり

或奮于将墜

或は将に墜んとするに奮い

或奮于已昌

或は已に昌なるより奮う

或災興无妄

或は災は無妄に興り

或福会不祥

或は福は不祥に会う

或患生藩屏

或は患は藩屏に生じ

或難起蕭牆

或は難は蕭牆より起こる

或病由唇齒

或は病は唇齒に由り

或疾亟膏盲

或は疾は膏盲に返まる

談笑萌事端

談笑に事端を萌し

酒食開戰場

酒食に戰場を開く

情慾之一発

情慾の一たび発すれば

利害之相戕

利害の相戕そくさう

劇力恣吞噬

劇力げつりきしく吞噬を恣にし

無涯罹禍殃

涯無く禍殃に罹る

山川纒表裏

山川は纒かに表裏するのみ

豆龍又荒涼

豆龍（雙？）又た荒涼たり

荊棘除難尽

荊棘 除かんとすれども尽し難く

芝蘭種未芳

芝蘭 種えれども未だ芳しからず

龍蛇走平地

龍蛇は平地を走り

玉石碎崑崗

玉石は崑崗に碎かる

善設称周孔

善く設くるは周孔を称し

能齊是老莊

能く齊しくするは是れ老莊

奈何言已病

奈何せん 言 已に病むを

安得意都忘

安んぞ 意 都て忘るるを得ん

この詩の冒頭から第二十八句「何に由りてか中央を奠めん」までの前半は、伏羲から五代までの「四千年の興亡」史の流れを、中間に「二万里の区字（字？）、四千年の興亡。五百 主 位を肇め、七十 国 疆を開く」を挾んで、第三十三句「或は六合を混同し」から第五十六句「玉石は崑崗に碎かる」までの後半は、「四千年の興亡」における「五百主」、「七十国」の種々の様相を詠じたものであり、最後の四句のうち「善く設くるは周孔を称し」は、『周易』「繫辞上伝」の「聖人は卦を設け象を觀、辞を焉まに繫けて吉凶を明らかにす」（聖人設卦觀象、繫辞焉而明吉凶）という原理を、「能く齊しくするは是れ老莊」は、『莊子』「齊物論」に展開されている万物齊同の思想を称賛したのである。そして最後の一聯のうち「奈何せん 言 已に病むを」は、『周易』「繫辞上伝」の「言は意を尽くさず」（言不尽意）をふまえ、「安んぞ 意 都て忘るるを得ん」は、『莊子』「外物」篇の「言は意に在る所以、意を得て言を忘る」（言者所以在意、得意而忘言）をふまえて、言語が情意を尽くさない以上、情意を忘却した境地に達したいということ、

つまり人間の歴史は人知を越えた天の法則であって、人類の歴史的事実は厳として存在することは認めても、そのことに対して人間の小賢しい感情は持たないということをいったものと思われる。要するにこの詩は、彼の『皇極經世書』に展開されている歴史観を詩を借りて披瀝したものであろう。ここで重要なのは、熙寧三年に作られたこの詩には、熙寧六年に作られた「安樂窩中一部書」に歌われている(一)、「父子君臣 廃す可けんや」や(二)、「治久しければ便ち憂う 強きものの跋扈するを、患深ければ仍りに念う 悪しきものを驅除せん」となどのようなあからさまな批判の表現はないことである。それに対してなぜ「安樂窩中一部書」詩においては(一)、(二)のように歌わなければならないのたろうか。(一)については単に彼の理論を表明するためではなく、王安石の「無君臣」を批判するためであるということ、(二)については単に歴史上の一般的なことを詠じたのではなく、王安石を含めた新法派の官僚に対する批判ということ、視野に入れることによって一層深く理解できるのではないか。詩題は「安樂窩中一部書」となっているけれども、この詩は「書皇極經世後」と違って、単に自著に対する賞賛であるばかりでなく、現実批判を通して彼の理論をあらためて確認するために作られた、と私は考えるのである。歴史法則に照らして考えれば、新法もいづれ瓦解する。

更に邵雍は熙寧七年、「莫如吟」(巻十二)と題する詩を三首作り、三番目の作品において次のように歌った。

君臣守以義 君臣は守るに義を以てし

父子守以仁 父子は守るに仁を以てす

義失為敵國 義失えば敵國と為り

仁失為路人 仁失えば路人と為る

「敵國」はやはり遼国や西夏を指すであろう。これらの諸外国は邵雍の意識では、「義」のない文化的に低い野蛮な民族であった。「莫如吟」の一番目の作品に「親しきは父子に如くは莫く、遠きは蛮夷に如くは莫し」(親莫如父子、

遠莫如蜜虫」と歌われている。「莫如吟」が邵雍の単なる独白ではなくて、当時の政治思想状況を意識して発せられたものであるならば、彼の批判の対象に王安石の「父子有り」と雖も君臣無し」があったと想定してもいいのではないか。邵雍は王安石の新法に中国民族の根幹を揺るがしかねない危険なものを感じていたのである。いずれにしても邵雍が王安石の新法に批判的であった根本的理由のひとつに、君臣問題があったと私は考える。

もっとも、王安石も負けてはいなかった。彼は中央の政治舞台を退いて、南京の鍾山に悠々自適の生活を送っていた晩年、「後元豊行」（『臨川先生文集』巻二）と題する詩を作り次のように歌った。

歌元豊

元豊を歌おう

十日五日一雨風

十日 五日 一たびの雨風

麦行千里不見土

麦行千里 土を見ず

連山没雲皆種黍

山に連なり 雲に没し 皆な黍を種ゆ

水秧綿綿復多稔

水秧 綿綿として 復た稔と多く

龍骨長乾挂梁椏

龍骨 長く乾き 梁椏に挂く

鱒魚出網蔽洲渚

鱒魚 網より出で 洲渚を蔽い

菽筍肥甘勝牛乳

菽筍 肥えて甘く 牛乳に勝る

百錢可得酒斗許

百錢もて酒斗許を得る可く

雖非社日長聞鼓

社日に非ずと雖も長に鼓を聞く

吳兒躑歌女起舞

吳兒は躑歌し 女は起ちて舞い

但道快樂無所苦

但だ道う 快樂して苦しむ所無しと

老翁墜水西南流

老翁は水を墜りて西南に流れ

楊柳中間杙小舟 楊柳の中間に小舟を杙ぐ

乘興歛眠過白下 興に乗じ 歛眠して 白下を過ぎ

逢人歛笑得無愁 人に逢えば 歛笑して愁い無きを得たり

「邵雍がいう「太平」は、形面上的できわめて個人的なものであった。それに対して、王安石の推進した新法の改革は、農民の生活に密着した形面下的なものであった。王安石は己れの行った改革によって、この世界は初めて経済的にも精神的にも豊かな「太平」を現出したと、具体的に詠じて自画自賛しているのである。「後元豊行」を歌った元豊（一〇六一—一〇六三）の時には、邵雍はすでにこの世の人ではなかったが、邵雍が仮にこの詩を読んだとしても、彼は何の興味も示さなかったかもしれない。同じく「太平」を考えていても、邵雍と王安石の間には深い溝があり、歩み寄るべき共通の橋梁はなかったからである。この詩を読んで邵雍は、己れは「水を壅りて西南に流れ、楊柳の中間に小舟を杙ぐ」「老翁」などとは違ふのじゃ、とつぶやくだけであったのではあるまいか（注23）。

最後に、やはり熙寧七年（一〇七五）、六十四歳の時に作られた邵雍の「举世吟」（卷十二）を引用して本論の結びとする。

举世自紛紛 世を挙げて自ら紛紛たり

誰為無事人 誰か無事の人為る

吾生独何幸 吾が生 独り何の幸いか

臥看洛陽春 臥して看る 洛陽の春

「世を挙げて自ら紛紛たり」、この句はおそらく新法の騒動を指しているのであろう。「相知の深き者とは、口を開けば天下の事を論じた」（『三朝名臣言行録』卷十四之一所引『呂氏家塾記』）という邵雍は、悟りを開いた人であるけれども、決して世の中の動向に無関心な人ではなかったのである（注24）。

結語

前回、私は「芳草」という僅かひとつの言葉をヒントに、邵雍のいわば思想遍歴の跡をたどりながら、邵雍の詩に現れた「芳草」について考えてみた。今回は、彼の「芳草」と関連させながら、彼の詩における「太平」謳歌の意味について考えてみた。私の考えでは、それは彼の思想の深化という一面と、新法批判という一面を持っているということであった。

正直な気持ちをここに告白すれば、中国哲学に素人の私が邵雍に取り組んだとき、初めはただ邵雍の描いた「芳草」について、「芳草」シリーズのひとつとして、簡単にまとめてみようという心積もりにはすぎなかった。ところが彼の作品を読んでいくうちに、「芳草」に限らず、邵雍は同じ言葉、同じ表現を多用するということに気づいた。ここに取りあげた「太平」もそのひとつである。もっとも、南宋の陸游（二二一—三〇）も自分の住居を「心太平菴」と号することなどに示される通り、「太平」という言葉をよく用いており、「太平」を多用する詩人が他にいないわけではない。しかし邵雍の場合、少し細かく読んでいくと、同じ言葉でも時代（年齢）によって対応の仕方が違うのである。彼は正統派の詩人ではないということを考えても、何か意味があるのではないかと考えてみたくなるのが人情である。かくてあれこれいじくり回しているうちに出来あがったのがこの拙論である。

文学を専門にしている私が、哲学者である邵雍に興味を持つようになったのは、何度も申し上げるように、彼の詩の中に「芳草」という言葉がよく使われている、というただこの一点にすぎない。邵雍が中国文学史上、確かに「芳草」を好んで歌った詩人の一人であるということは、まぎれもない事実である。だが邵雍の千五百首に及ぶ膨大な作品を思えば（注25）、彼の詠じた二十首に満たない「芳草」など、芥子粒にも及ばない。そしてこの小論で論じた「太平」となると、更にこの芥子粒にも及ばないもの余波にすぎない。邵雍は周知の通り、学徳兼備の君子人。こ

れまでの学問的成果を我流に継ぎはぎしただけのような小論が、「小人の腹をもって君子の心となす」愚を犯していなければ幸いである。

注釈

- 1、『大谷女子大学紀要 第30号第一輯』所収（一九九五年十月）。
- 2、邵雍（一〇一—一〇七七）とほぼ同時代の曾鞏（一〇九—一〇八三）に、「西湖二首」（『元豊類藁』卷七）と題する詩があり、彼は「其の二」において次のように詠じている。「湖面平隨羣岸長、碧天垂影入清光。一川風露荷花暝、六月蓬瀛燕坐涼。滄海桴浮成曠蕩、明河槎上更微茫。何須辛苦求人外、自有仙鄉在水鄉」。問題は最後の一聯である。つまり曾鞏もこの地上を「仙郷」（仙界）と考えているのである。夏漢寧氏の著書『曾鞏』（中華書局 一九九三年四月）によれば、詩題の「西湖」は齊州の大明湖、そして曾鞏が齊州の刺史であったのは、熙寧四年（一〇七二）六月から熙寧六年（一〇七三）六月まで。詩中に六月とあるから、右の作品はおそらく、熙寧五年（一〇七三）の六月に作られたものと思われる。この年、前稿で論じたとおり、邵雍がすでに地上の仙界という思想を持っていた。つまりこの頃、邵雍に限らず知識人の間では、仙界はこの地上にあるという思想が共通認識としてあったということである。ただ、曾鞏の場合、己れの眼前に広がる「水郷」こそ「仙郷」と詠じた背後には、おそらくある種の不満を慰撫する心理が働いていた。「平生拙人事、出走臨東藩」。これは、曾鞏の「西湖一月二十日」（『元豊類藁』卷五）と題する詩の冒頭の一聯である。彼は「東藩」つまり齊州の刺史に、決して満足してはいなかったのである。それにしても仙界はこの地上にあるという思想が共通認識としてこの時代にあったことは、銘記しておかなければならない。
- 3、『朱子学と陽明学』一頁（岩波新書 一九六七年五月）。
- 4、柳永詞の総数については、村上哲見『宋詞研究』第三章 柳耆卿詞論 二二六頁（創文社 昭和五十一年三月）参照。
- 5、薛瑞生校註『秦章集校註』「前言」一八頁（中華書局 一九九四年十二月）。
- 6、上野日出刀「邵雍伝」（『久留米工業短大研究報告 Ⅷ』）所収 一五頁下段。
- 7、「邵雍の生涯と詩」（吉川博士退休記念中国文学論集）所収 五二五頁 筑摩書房 一九六八年）。

8、邵雍は王安石の夷弟・王安国（字は平甫）とは交流があった。邵雍に「和王平甫教授賞花処惠茶韻」（巻八）と題する詩があり、次のように歌っている。「太学先生喜識花、得花精勉却因茶。万红香裏烹余後、分送天津第一家。王安国は夷兄・王安石の新法に必ずしも積極的に荷担した風ではなく、また西京国子教授時代には、声色に惑溺したなどと『宋史』（巻三百二十七）の本伝に記されるところを考えると、やさしいけれども気弱な人物だったのではないだろうか。

9、上野日出刀「邵雍伝」一五頁下段。

10、上野日出刀氏は「宇泰の意未詳。宇内と同じような意味か」（『伊川擊壤集』七十頁）と注され、今井宇三郎・大島晃・福田俊昭譯註『邵雍節・伊川擊壤集』（朱子学大系第二巻 朱子の先駆（上））所収 二八二頁 明德出版社 昭和五十三年四月）には何も注積されていない。

11、『太平御覽』巻二十六「時序部十一 冬上」。

12、『宋史』巻十五「神宗本紀二 熙寧七年の条」から、関連する記事を時間順に列記すると次のとおりである。

二月辛未、発常平米振河陽饑民。

三月、詔以災求異直言。

四月癸酉、以旱罷方田。

丙戌、王安石罷知江寧府。

五月壬寅、雨雹。

癸卯、大雨雹。

七月癸亥、詔河北西路捕蝗。（中略）以米十五万石振河北西路災傷。

八月丁丑、以募粟振漢蕃饑民。

辛卯、除放邢・洛等州秋税。

九月戊戌、以時雨降、詔河北・京西・陝西・淮南等路勸民趨耕。

十月戊寅、詔浙西路提舉司出米振常・潤州饑。

辛巳、以河北災傷、減州軍文武官員。

癸巳、以常平米於淮南西路易饑民所掘蝗種。又振河北東路流民。

- 13、『宋史』卷四百七十一「姦臣一 呂惠卿伝」に「始、惠卿逢合安石、驟致執政、安石去位、遂極力排之、至寘其私書於上。安石退処金陵、往往写福建子。蓋深悔為惠卿所誤也」とある。
- 14、邵雍には独特の数学による「宇宙時間」の計算があって、彼が生きている時代は、「天地全盛の時期が過ぎて、宇宙時間はそろそろ下り坂に向かいつつある」（島田前掲書七四頁）と考えられていた。
- 15、上野日出刀「邵雍の生涯と詩」五一九頁。
- 16、邵雍は息子の伯陽に次のように言ったことがある。「名利不可兼也。吾本求名、既為世所知矣。何用利哉。故甘貧樂道、平生無不足之意」（『聞見録』卷十九）。
- 17、『王安石』四五頁（中国詩人選集 第四卷 岩波書店 昭和三十七年五月）。
- 18、内山俊彦氏は「王安石思想初探」（『日本中国学会報 第十九集』所収 一六五頁）において、次のように述べられた。「王安石の考えでは一引用者）政治の概念の領域を、主権者・政治機構と広汎な人民（小市民・小地主・小商人等）によって構成される空間に拡大すること、にあった。しかし『王安石にしても、政治の主体を民に置くのではもちろんない』。
- 19、宮崎市定氏は「王安石の政治上における抱負は、『上仁宗皇帝言事書』にみえているが、『其中に当時の弊害を述べて、『流品の別が政治を墜落せしめたことを述べている』。『又『周官新義』、天官冢宰の条に、『流品の別なきを理想としている。されば倉法の目的も結局この理想に到達すべき第一歩に外ならぬ』と言われた。『王安石の吏士合一策一倉法を中心として』」（『全集』10 宋』所収 一五六頁 岩波書店 一九九二年七月）。
- 20、清水茂『王安石・解説』七頁。
- 21、『不畏浮雲遮望眼——説王安石』登飛來峰』（『宋詩憶説』所収 一一五頁 北京大学出版社 一九九三年十一月）。
- 22、『王安石』四四頁。
- 23、なお清の薛雪が『一瓢詩話・一八八』において「王荊公好將前人詩竄点字句為己詩、亦有竟勝前人原作者」といったが、邵雍が王安石の文学に対して敬意を払っていたように、王安石も邵雍の文学に対しては影響されるところがあった。次に引用する詩は、王安石の「北山」と題する作品である。「北山輪緑漲橫波、直壑回塘瀟瀟時。細數落花因坐久、緩尋芳草得歸遲。この詩の最後の一句「緩尋芳草得歸遲」について、清水茂氏は『孟浩然の「王侍御維に留別」の「芳草を尋ねて去かんと欲して、故人と違わんことを惜しむ」の句を意識しているであろう』（『王安石』89頁）と指摘された。私は更に李壁が注引するとおり、邵雍の熙寧七年の作「月皎閑歩」（卷十二）「困隨芳草行來遠、為愛清波婦去遲。独歩独吟仍独坐、初凉天氣未

寒時」を下敷きにしていると思う。「南京隱退後」(清水前掲書)の王安石は、もよからの世捨人・邵雍の境地を樂しむことができたということであろうか。

- 24、官僚の道を断念した邵雍は、政治にまったく無関心であったのではなく、政治は他人に任せようと考えていたものと思われる。熙寧八年(一〇七五)、六十五歳の時の作「觀造化吟二首・其二」において、次のように詠じている。「吾曹養拙頼明時、為幸居多寧不知。天下英才中通跡、人間好景處閑開。生來只慣見豐稔、老去未嘗經亂離。五事廢將前代準、帝堯而下固無之」。問題は「天下英才中通跡」(天下の英才 跡を遁るるに中ゆ)である。上野日出刀氏はこの句を「天下の英才 中ごろ跡を遁れ」と訓読し、「天下の英才たるこの私も中年にして世を遁れた」と訳された(『中國古典新書 伊川擊壤集』一五一・一五二頁)。しかし、この第三句が第四句の「人間の好景 処に眉を開く」と対になっていること、つまり「人間の光景」が作者以外のもの、「処に眉を開く」が作者を指すことから考えて、「天下の英才」は、例えば司馬光など、実際に政治にたずさわった人々を、また「中」字は、この場合は「堪」と同じ意味であり(張相『詩詞曲語釋匯釈』卷四「中」字の項を参照)、「跡を遁る」のは作者を指すのではないだろうか。結局この一句は、天下には優れた人材が多いので、自分は身を引いてもよいという意味になる。この句の解釈には、『聞見録』(卷十八)の次の一節が参考になる。「伯溫嘗侍家庭、請於康節先公曰、大人至和中、仁宗在御、富公當國、可謂盛矣。乃謝聘不起、何也。先公曰、本朝至仁宗、政化之美、人材之盛、朝廷之尊、極矣。前或未至、後有不及也。天之所命、非偶然者。吾雖出、尚何益。是非爾所知」。
- 25、上野日出刀『中國古典新書 伊川擊壤集』二四頁。邵雍自身は「擊壤三千首、行窩二十家」(『擊壤吟』卷十七)、「胸中風雨吼筆下龍蛇走。前後落人間、三千有餘首」(『失詩吟』卷十七)、「三千來首收清月、二十余年撚白髭」(『首尾吟其七』卷二十)など、三千首と言っている。

(一九九五年十二月六日受理)

